

日蓮大聖人御書全集

しょうじょうだいじょうふんべつしょう

小乗大乘分別抄

新版 629
〜
637

しようじようだいじようふんべつしよう

小乗大乘分別抄

ぶんえい ねん

ときじょうにん

文永10年('73)*

(富木常忍)

そ しようだいさだ

いっすん もの いっしやく もの たい

夫れ、小大定めなし。一寸の物を一尺の物に対しては

しょう い べしやく おとこ たい ろくしやくしちしやく おとこ だい

小と云い、五尺の男に対しては六尺七尺の男を大の

おとこ い げどう ほう たい いっさい だいしよう ぶつきよう みな

男と云う。外道の法に対しては一切の大小の仏教を皆

だいじよう い だいほうとうぜん

大乘と云う。『大法東漸してより』とは、通じて仏教を指

だいほう とう しゃく

ぶつきよう

して、もって大法となす」等と釈する、これなり。仏教に

い ろくおんじゅうにねん せつ し あこんきようとう いっさい しようじようきよう

入つても、鹿苑十二年の説、四阿含経等の一切の小乗経

しょうだいじようきよう たい しようじようきよう な

をば、諸大乘経に対して小乗経と名づけたり。また

しよだいじようきよう

だいじよう

なか

おと

きよう

しようじよう

い

諸大乘経には、大乘の中にとりて劣る教を小乗と云

けごん

だいじようきよう

よ

しようぼう

ねが

もう

う。華嚴の大乘経に、「その余の小法を楽しめるもの」と申

もん

てんだいだいし

しようぼう

つね

す文あり。天台大師は、「この『小法』というのは常の

しようじようきよう

じゆうじ

だいほう

たい

じゆうじゆう

小乗経にはあらず。十地の大法に対して、十住・

じゆうぎよう

じゆうえこう

だいほう

くだ

しようぼう

な

しやく

たま

十行・十回向の大法を下して小法と名づく」と釈し給え

り。

ほけきようだいいち

かん

ほうべんぼん

しようじよう

また法華経第一の巻の方便品に、「もし小乗をもつて

ないしいちにん

け

もう

もん

てんだい

みようらく

あごんきよう

乃至一人をも化せば」と申す文あり。天台・妙楽は、阿含経

しようじよう

けごんぎよう

べつきよう

ほうどう

を小乗というのみにあらず、華嚴経の別教、方等・

はんにやきよう つう べつ だいじよう しょうじよう さだ げんぎ だいいち

般若経の通・別の大乘をも小乗と定む。また玄義の第一

しょう え だい き ぜん とん じんごう もう

に、「小を会して大に帰せば、これ漸・頓、混合す」と申す

しゃく ちしょうだいし はじ けこんぎよう お はんにやきよう

釈をば、智証大師は「始め華嚴経より終わり般若経にい

しきようはつきよう ごんじつ しょうだいじようきよう ぜん とん しゃく

たるまでの四教八教の権実の諸大乘経を、『漸・頓』と釈

みんごう い はつきよう え いちだいえんぎよう がっ

す。『混合』と云うは、八教を会して一大円教に合す」と

判 そうら

こそ、ことわられて候え。

ほけきよう じゆりようほん しょうぼう ねが とくはく くじゅう もの

また法華経の寿量品に、「小法を楽しめる徳薄・垢重の者」

もう もん てんだいだいし きようもん しょうぼう い

と申す文あり。天台大師は、この経文に「小法」と云う

しょうじようきよう しょうだいじようきよう

は、小乗経にもあらず、また諸大乘経にもあらず、

くおんじつじよう

と

けこんぎよう

えんないしほうどう

はんにや

ほけきよう

久遠実成を説かざる華嚴經の円乃至方等・般若・法華經の

しやくもんじゆうしほん

えんとん

だいほう

しやうじよう

ほう

迹門十四品の円頓の大法まで小乗の法なり、また、

けこんぎよう

しやだいじようきよう

きようしゆ

ほつしん

ほうしん

びるしやな

華嚴經等の諸大乘經の教主の法身・報身・毘盧遮那・

るしやな

だいにちによらいとう

しやうぶつ

しやく

たま

こころ

盧舍那・大日如来等をも小仏なりと釈し給う。この心な

ねはんぎよう

だいにちきようとう

いつさい

だいしやう

ごんじつ

けんみつ

しよきよう

らば、涅槃經・大日經等の一切の大小・權実・顯密の諸經

みなしやうじようきよう

はつしゆう

なか

くしやしゆう

じやうじつしゆう

りつしゆう

は皆小乗經、八宗の中に俱舍宗・成実宗・律宗を

しやうじよう

い

けこんしゆう

ほつそしゆう

さんろんしゆう

小乗と云うのみならず、華嚴宗・法相宗・三論宗・

しんこんしゆうとう

しやだいじようしゆう

しやうじようしゆう

てんだいしゆう

真言宗等の諸大乘宗を小乗宗として、ただ天台宗

いつしゆう

じつだいじようしゆう

一宗ばかり実大乘宗なるべし。

かれがれ

だいじようしゅう

よ

きようぎよう

た

彼々の大乘宗の依るところの経々には、絶えて

にじようさぶつ

くおんじつじよう

さいだい

ほう

説

たま

たと

二乗作仏・久遠実成の最大の法をとかせ給わず。譬えば、

いつしやくにしやく

いし

も

もの

だいりき

いちじようにじよう

いし

一尺二尺の石を持つ者をば大力といわず、一丈二丈の石

も

だいりき

い

けごんぎよう

ほうかいえんゆう

しじゅういちい

を持つを大力と云うがごとし。華嚴經の法界円融・四十一位、

はんにやきよう

こんどうむに

じゅうはつくう

けんねじとう

じゅうじ

ようらくきよう

般若經の混同無二・十八空・乾慧地等の十地、瓔珞經の

ごじゅうにい

にんのうきよう

ごじゅういちい

やくしきよう

じゅうに

だいがん

五十二位、仁王經の五十一位、藥師經の十二の大願、

そうかんぎよう

しじゅうはちがん

だいにちきよう

しんごん

いんけいとう

双觀經の四十八願、大日經の真言・印契等、これらは、

しようじようきよう

たい

だいほう

ひほう

ほけきよう

にじようさぶつ

小乗經に対すれば大法・秘法なり。法華經の二乗作仏・

くおんじつじよう

たい

しようじよう

ほう

いつしやくにしやく

いちじよう

久遠実成に対すれば小乗の法なり。一尺二尺を一丈

にじよう たい

二丈に對するがごとし。

にじようさぶつ くおんじつじよう

ほけきよう

かんよう

しよきよう

また、二乗作仏・久遠実成は、法華經の肝要にして、諸經

たい

き

ほけきよう

なか

に對すれば奇たりといえども、法華經の中にてはいまだ

きみよう

いちねんさんぜん

もう

ほうもん

き

なか

き

みよう

奇妙ならず。一念三千と申す法門こそ、奇が中の奇、妙が

なか

みよう

けごん

だいにちきようとう

ぶんた

中の妙にて、華嚴・大日經等に分絶えたるのみならず、

はつしゅう

そし

なか

しんごんとう

しちしゅう

にんし

な

知

八宗の祖師の中にも真言等の七宗の人師、名をだにもし

てんじく

だいろんじ

りゅうじゅぼさつ

てんじんぼさつ

うち

たま

ふく

らず。天竺の大論師、竜樹菩薩・天親菩薩は、内には珠を含

そと

書

顕

たま

み、外にはかきあらわし給わざりし

ほうもん

法門なり。

しかるを、雨衆が三徳、米斉が六句の、先仏の教えを盗み
取うしゆ さんとく べいさい ろつく せんぶつ おし ぬす
けごんしゆう ちようかん しんごんしゆう ぜんむいとう てんだい

とれるように、華嚴宗の澄観、真言宗の善無畏等は、天台
だいし いちねんさんぜん ほうもん ぬす と わ よ きよう

大師の一念三千の法門を盗み取って、我が依るところの経
こころ ほとけ しゆじよう もん こころ じつそう

の「心、仏および衆生」の文の心とし、「心の実相」
もう もん たましい

と申す文の神とせるなり。かくのごとく盗み取って我が
しゆう きぼ かえ てんだいほんしゆう くだ

宗の規模となせるが、また還って天台本宗をば下して、
けごん しんごんしゆう おと もう にんし せけん

華嚴・真言宗には劣れるなりと申す。これらの人師は、世間
ぬすびと ほう ぬすびと

の盗人にはあらねども、法の盗人なるべし。これらをよく
たず あき

よく尋ね明らむべし。

せけん てんだいしゅう がくしや

しよしゅう ひとびと

い

また、世間の天台宗の学者ならびに諸宗の人々の云わ

ほけきよう

にじようさぶつ

くおんじつじよう

とううんぬん

く「法華経はただ二乗作仏・久遠実成ばかりなり」等云々。

いまはんきつ

い

なんだち

しやうぶく

つ

にじようさぶつ

今反詰して云わく、汝等が承伏に付いて、ただ二乗作仏と

くおんじつじよう

ほけきよう

しよきよう

久遠実成ばかり法華経にかぎつて諸経になくば、これなり

き なか き

とも、あに奇が中の奇にあらずや。

にじようさぶつ

しよきよう

ほとけ

みでし

ずだだいいち

二乗作仏、諸経になくば、仏の御弟子、頭陀第一の

かしよう

ち えだいいち

しやりほつ

じんずうだいいち

もくれんとう

じゆうだいでし

迦葉・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子、

せんにひやく

らかん

まんにせん

しやうもん

むしゆおく

にじようかい

か こおんのんこう

千二百の羅漢、万二千の声聞、無数億の二乗界、過去遠々劫

みらいむしゆこう

ほけきよう

あ

より未来無数劫にいたるまで、法華経に値いたてまつらず

なが しきしん

めつ

ようふじようぶつ

もの

おお

ば、永く色心ともに滅して永不成仏の者となるべし。あに大

とが

にじようかいほとけ

かしようとう

いなる失にあらずや。また二乗界仏にならずば、迦葉等を

くよう

ぼんてん

たいしやく

ししゆ

はちぶ

びく

びくにとう

にかい

供養せし梵天・帝釈・四衆・八部・比丘・比丘尼等の二界

はちばん

しゆ

くおんじつじよう

きよう

八番の衆は、いかんがあるべき。また久遠実成がこの経に

かぎ

さんぜ

しよぶつ

むじようせんめつ

ほう

だ

たと

限らずんば、三世の諸仏、無常遷滅の法に堕しなん。譬え

てん

しよじよう

にちがつ

ば、天に諸星ありとも、日月ましまさずんばいかんがせん。

ち

そうもく

だいち

なんじ

地に草木ありとも、大地なくばいかんがせん。これは汝が

しようぶく

ぎ

承伏についての義なり。

じつ

かんが

もう

にじようさぶつ

くかい

実をもつて勘え申さば、二乗作仏なきならば、九界の

しゅじようほとけ

成

ほけきよう

こころ

ほうに

理

衆生仏になるべからず。法華經の心は、法爾のことわり

いっさいしゅじよう

じっかい

ぐそく

たと

ひといちにん

かなら

として一切衆生に十界を具足せり。譬えば、人一人は必ず

しだい

いちだい欠

ひと

いっさい

四大をもつてつくれり。一大かけなば人にあらじ。一切

しゅじよう

じっかい

えしよう

にほう

ひじよう

そうもく

いちみじん

衆生のみならず、十界の依正の二法、非情の草木、一微塵に

みなじっかい

ぐそく

にじようかいほとけ

よかい

いたるまで、皆十界を具足せり。二乗界仏にならずば、余界

なか

にじようかい

ほとけ

よかい

なか

にじようかい

の中の二乗界も仏になるべからず。また余界の中の二乗界

ほとけ

よかい

はっかいほとけ

仏にならずば、余界の八界仏になるべからず。

たと

ふぼ

たも

もの

きようだいくにん

ににん

譬えば、父母ともに持ちたる者、兄弟九人あらんか。二人

ぼんげ

もの

さだ

よ

しちにん

かなら

ぼんげ

もの

は凡下の者と定められれば、余の七人も必ず凡下の者となる

ほとけ きよう ふ ぼ くかい しゅじよう じっし

べし。仏と経とは父母のごとし。九界の衆生は実子なり。

しようもん えんかく ににん ようふじようぶつ もの ぼさつ ろくぼん

声聞・縁覚の二人、永不成仏の者となるならば、菩薩・六凡

しちにん とくどう 許 いま さんがい みな

の七人あに得道をゆるさるべきや。「今この三界は、皆これ

わ う なか しゅじよう わ こ

我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり

ないし われいちにん よ くご もん し

乃至ただ我一人のみ、能く救護をなす」の文をもつて知る

べし。

ぼさつ もう かなら しぐせいがん 発 だいいち

また、菩薩と申すは、必ず四弘誓願をおこす。第一の

しゅじようむへんせいがんどう がんじようじゅ だいいし むじようぼだいいせいがんしよう

衆生無辺誓願度の願成就せずば、第四の無上菩提誓願証

がん じよう ぜんしみ しょきよう ぼさつ ぼんぷ

の願は成ずべからず。前四味の諸経にては、「菩薩・凡夫

ほとけ

成

にじよう

なが

ほとけ

とううんぬん

は仏になるべし、二乗は永く仏になるべからず」等云々。

賢

ぼさつ

果

無

ろくぼん

とも

しかるを、かしこげなる菩薩も、はかなげなる六凡も、共に

おも

われ

ほとけ

にじよう

ほとけ

思えり。「我ら仏になるべし。二乗は仏にならざれば、か

か

どう

い

おも

にじよう

歎

しこくして彼の道には入らざりける」と思う。二乗はなげき

抱

どう

い

おそ

悲

をいだき、「この道には入るまじかりしものを」と恐れかな

いま

ほけきよう

にじよう

ほとけ

たま

とき

にじよう

しみしが、今、法華經にして二乗を仏になし給える時、二乗

ほとけ

成

くかい

じようぶつ

説

顯

仏になるのみならず、かの九界の成仏をもときあらわし

たま

もろもろ

ぼさつ

ほうもん

き

おも

われ

おも

給えり。諸の菩薩、この法門を聞いて思わく「我らが思い

果

無

にぜん

きようぎよう

にじようほとけ

ははかなかりけり。爾前の経々にして二乗仏にならずば、

われ もの 我らもなるまじかりける者なり。 にじよう 二乗を永不成仏と説き給 たも

にじよういちにん

歎

われ おな

うは、二乗一人ばかりなげくべきにあらざりけり。我らも同

こころ得

じなげきにてありけり」と心うるなり。

じゆりようほん

くおんじつじよう

にぜん

きようぎよう

また寿量品の久遠実成が爾前の経々になきことをも

おも

にぜん

くおんじつじよう

ほとけ

てんかい

つて思うに、爾前には久遠実成なきのみならず、仏は天下

だいいち

だいもうご

ひと

にぜん

だいいち

けごんぎよう

第一の大妄語の人なるべし。爾前の大乗第一たる華嚴経・

だいにちきようとう

はじ

しょうかく

じよう

われ

むかしどうじよう

ざ

大日経等に、「始めて正覚を成ず」「我は昔道場に坐す」

とううんぬん

しんじつじんじん

しょうじき

ほうべん

す

むりようぎきよう

等云々。「真実甚深」「正直に方便を捨つ」の無量義経と

ほけきよう

しやくもん

われ

さき

どうじよう

われ

はじ

法華経の迹門には、「我は先に道場にして」「我は始め

どうじよう

ざ

と

きようもん

じゆりようほん

道場に坐す」と説かれたり。これらの経文は、寿量品の

われ じつ じようどう

このかた むりようむへん

「しかるに、我は実に成仏してより已来、無量無辺なり」

もん

おも み

だいもうご

の文より思い見れば、あに大妄語にあらずや。

ほとけ

いっしん

だいもうご

み

いっしん

そな

ろっこん

仏の一身、すでに大妄語の身なり。一身に備えたる六根

しよほう

じつ

だいこおり

うえ

つく

もろもろ

いえ

の諸法、あに実なるべきや。大氷の上に造れる諸の舎は、

はる

迎

やぶ

すいちゆう

まんげつ

まこと

たい

春をむかえては破れざるべしや。水中の満月は、実に体あ

にぜん

じようぶつ

おうじようとう

すいちゆう

せいげつ

に

りや。爾前の成仏・往生等は、水中の星月のごとし。爾

ぜん

じようぶつ

おうじようとう

たい

したが

かげ

ほんもんじゆりようほん

前の成仏・往生等は、体に随う影のごとし。本門寿量品

み

じゆりようほん

ちえ

離

しよきよう

か

をもつて見れば、寿量品の智慧をはなれては、諸経は跨

せつ　とうぶん　とくどうとも　うみようむじつ
節・当分の得道共に有名無実なり。

てんだいだいし

ほうもん

どうじよう

ひと

かくち

げんぎ

天台大師、この法門を道場にして独り覚知し、玄義

じっかん

もんぐじっかん

しかんじっかんと書

付

たも

しよきよう

十卷・文句十卷・止観十卷等かきつけ給うに、諸經に

にじようさぶつ

くおんじつじようた

よし

か

置

たも

二乗作仏・久遠実成絶えてなき由を書きおき給う。これは、

なんぼく

じっし

きようそう

まよ

さんじ

しじ

ごじ

ししゅう

ごしゅう

南北の十師が教相に迷つて三時・四時・五時、四宗・五宗・

ろくしゅう

いっとん

はんまん

さんぎよう

しきようとう

た

おし

せんじん

しようれつ

六宗、一音・半満・三教・四教等を立てて教えの浅深・勝劣

まよ

ひぎ

やぶ

がんぜん

に迷いし、これらの非義を破らんがために、まず眼前たる

にじようさぶつ

くおんじつじよう

しよきよう

しようれつ

さだ

たま

二乗作仏・久遠実成をもつて諸經の勝劣を定め給いしな

よかい

とくどう

許

り。しかりといって、余界の得道をゆるすにはあらず。そ

のち

けごんしゅう

ごきよう

ほつそうしゅう

さんじ

しんごんしゅう

けんみつ

の後の、華嚴宗の五教、法相宗の三時、真言宗の顕密・

ごぞう

じゅうじゅうしん

ぎしやく

しくとう

なんさんほくしち

じっし

ぎ

五藏・十住心・義釈の四句等は、南三北七の十師の義よ

あやま

きようそ

りもなお誤れる教相なり。

たし

じしゅう

がくしや

これらは他師のことなればさておきぬ。また、自宗の学者

てんだい

みようらく

でんぎようだいし

おんしやく

まよ

にぜん

きようぎよう

が、天台・妙楽・伝教大師の御釈に迷つて「爾前の経々

にじようさぶつ

くおんじつじよう

な

よかい

とくどう

には二乗作仏・久遠実成ばかりこそ無けれども、余界の得道

あ

もう

ひとびと

いちにんににん

にほんこく

ひろ

は有り」なんと申す人々、一人二人ならず、日本国に弘ま

たしゅう

ひとびと

たよ

え

てんだいしゅう

うしな

れり。他宗の人々これに便りを得て、いよいよ天台宗を失

がくしや

たと

やんま

くも

あみ

かわ

う。これらの学者は、譬えば、野馬の蜘蛛の網にかかり、渴

しか かげろう

追

果 無

れい

よりとも

うだいしよう

ける鹿の陽炎をおうよりもはかなし。例せば、頼朝の右大将

け やすひら う

やすひら たぶら

よしつね う

家は、泰衡を討たんがために泰衡を誑かして義経を討たせ、

だいじょうのにゆうどうきよもり

げんじ

ほろ

よ

わ

太政入道清盛は、源氏を喪ぼして世をとらんがために我

おじ

たいらのうまのすけただまさ

き

よしとも

誑

が伯父・平馬助忠正を切る、義朝はたばらかされて

じぶ ためよし き

ひとびと

慈父・為義を切るがごとし。これらは、はかなき人々の

例

ためしなり。

てんだいだいし

ほけきよう

ほか

きようぎよう

にじようさぶつ

天台大師、「法華経より外の経々には、二乗作仏・

くおんじつじよう た

しやく

たま

ぼさつ

さぶつ

久遠実成は絶えてなし」なんと釈し給えば、菩薩の作仏・

ぼんぷ

おうじよう

打

おも

われ

にじよう

凡夫の往生はあるなんめりとうち思つて、我らは二乗にも

にぜん きようぎよう

とくどう

おも

あらざれば爾前の経々にても得道なるべし、この念

しんちゆう

差

挟

なか

かんぎよう

くほんおうじよう

心中にさしはさめり。その中にも、観經の九品往生は

願

易

ほけきよう

投

捨

ねんぶつもう

ねがいやすきことなれば、法華經をばなげすて、念仏申し

じようぶつ

う

かんのん

せいし

あみだぶつ

あ

て浄土に生まれて觀音・勢至・阿弥陀仏に値いたてまつり

じようぶつ

と

うんぬん

とうせい

てんだいしゆう

ひとびと

はじ

て成仏を遂ぐべしと云々。当世の天台宗の人々を始めと

しよしゆう

がくしや

して、諸宗の学者かくのごとし。

じつぎ

もう

いつさいしゆじよう

じようぶつ

ろくどう

実義をもつて申さば、一切衆生の成仏のみならず、六道

い

じつぽう

じようぶつ

おうじよう

ほけきよう

を出でて十方の浄土に往生することは、かならず法華經の

ちから

れい

にほんこく

ひと

とうど

だいいり

い

力なり。例せば、日本国の人、唐土の内裏に入らんことは、

かなら にほん こくおう ちよくじょう

必ず日本の国王の勅定によるべきがごとし。穢土を離れ

じようど い かなら ほけきよう ちから

て浄土に入ることとは、必ず法華經の力なるべし、例せば、

たみ むすめ ないしかんぱく だいじん むすめ いた だいおう たね お

民の女、乃至閼白・大臣の女に至るまで、大王の種を下ろ

う こ おう だいおう むすめ

せば、その産める子、王となりぬ。大王の女なれども、臣下

たな かいにん こ おう

の種を懷妊せば、その子、王とならざるがごとし。

じつぽう じようど う もの さんじよう にんてん ちくしようとう

十方の浄土に生まるる者は、三乗・人天・畜生等まで

みな おう しゅしよう な う みな ほとけ 成

も、皆、王の種姓と成って生まるべし。皆、仏となるべ

ゆえ あごんきよう たみ むすめ たみ おっと けごん ほうどう

きが故なり。阿含經は、民の女の民を夫とし、華嚴・方等・

はんにやとう しん むすめ しん おっと けごんぎよう

般若等は、臣の女の臣を夫とせるがごとし。また華嚴經・

ほうどう はんにや だいにちきようとう えんぎよう ぼさつとう おうじよ しんか おつと

方等・般若・大日経等の円教の菩薩等は、王女の臣下を夫

みな じようど う ほう

とせるがごとし。皆、浄土に生まるべき法にはあらず。

けこん あこん ほうどう はんにやとう きようぎよう あいだ ろくどう い

また華嚴・阿含・方等・般若等の経々の間に六道を出

ひと かがれ きようぎよう ちから かこ

ずる人あり。これは彼々の経々の力にはあらず。過去に

ほけきよう たね う ひと げんさい ほけきよう ま き

法華経の種を殖えたりし人、現在に法華経を待たずして機

進 ゆえ にぜん きようぎよう えん かこ ほけきよう たね

すすむ故に、爾前の経々を縁として、過去の法華経の種を

ほつとく じようぶつ おうじよう 遂 れい えんかく むぶつ

発得して成仏・往生をとぐるなり。例せば、縁覚の無仏の

よ ひけらくよう かん どつかく ぼだい しよう こうよう ふ ぼ

世にして飛花落葉を觀じて独覺の菩提を証し、孝養父母の

もの ぼんてん う ひけらくよう こうよう ふ ぼとう どつかく

者の梵天に生まるるがごとし。飛花落葉・孝養父母等は独覺

ぼんてん

しゅいん

えん

かこ

と梵天との修因にはあらねども、かれを縁として過去の

しゅいん

ひ

か

てん

しょう

どつかく

ぼだい

しょう

修因を引きおこし、彼の天に生じ、独覚の菩提を証す。

かこ

しょうじょう

さんげん

しぜんこん

い

しかるに、なお過去に小乗の三賢・四善根にも入らず、

うろ

ぜんじょう

しゅ

もの

つき

かん

はな

えい

こうようふ

ぼ

有漏の禅定をも修せざる者は、月を觀じ花を詠じ孝養父母

ぜん

しゅ

どつかく

しきてん

しょう

かこ

の善を修すれども、独覚ともならず、色天にも生ぜず。過去

ほけきょう

たね

う

ひと

けごんぎょう

せき

はべ

に法華經の種を殖えざる人は、華嚴經の席に侍りしかども、

しよじ

しよじゅう

登

ろくおんせつきょう

みぎり

けんじ

初地・初住にもものぼらず、鹿苑説教の砌にても見思をも

だん

かんぎようとう

くほん

おうじょう

遂

だいししょう

断ぜず、觀經等にても九品の往生をもとげず。ただ大小

けんい

い

しょうい

登

ほけきょう

きた

の賢位のみに入つて聖位にはのぼらずして、法華經に来つ

はじ ぶつしゅ しんでん お いっしょう しよじ しよじゅうとう のぼ
て始めて仏種を心田に下ろして、一生に初地・初住等に登

もの

ねはん ざ

ないしめつご みらい

る者もあり。また涅槃の座へさがり、乃至滅後・未来まで

ひと

かこ ほけきよう たね う

ひとびと

けちえん

ゆく人もあり。過去に法華經の種を殖えたる人々は、結縁の

こうはく

したが

けごんぎよう えん

えん

しよじ

しよじゅう

のぼ

ひと

厚薄に随つて、華嚴經を縁として初地・初住に登る人も

あごんきよう えん

けんじ

だん

にじよう

もの

あり。阿含經を縁として見思を断じて二乗となる者あり。

かんぎようとう くほん

ぎようごう えん

えん

おうじよう

もの

觀經等の九品の行業を縁として往生する者もあり。

ほうどう

はんにや

し

かれがれ

方等・般若もここをもつて知んぬべし。これらは彼々の

きようぎよう

ちから

ほけきよう

ちから

經々の力にはあらず。ひとえに法華經の力なり。

たと

たみ

むすめ

おう

たね

お

ひと知

たみ

譬えば、民の女に王の種を下ろせるを、人しらずして民

こ おも だいじんとう むすめ おう たね お ひと
の子と思い、大臣等の女に王の種を下ろせるを、人しらず

しんか こ おも だいおう たず みな
して臣下の子と思えども、大王よりこれを見ぬれば、皆、

おうしゆ にぜん かいげ いた ひと ほけきよう
王種となるべし。爾前にして界外へ至る人を、法華經より

たず みな ほけきよう とくどう かこ
これを尋ぬれば、皆、法華經の得道なるべし。また、過去に

ほけきよう たね う ひと こんどん にぜん きようぎよう
法華經の種を殖えたる人の、根鈍にして爾前の經々に

ほつとく ひとびと ほけきよう とくどう 成 にぜん
発得せざる人々は、法華經にいたりて得道なる。これは爾前

きようぎよう 乳 母 后 ばら たいし おうじ い
の經々をばめのととして、きさき腹の太子・王子と云う

がごとくなるべし。

ほとけ めつご しょうほういつせんねん あいだ ざいせ
また仏の滅後にも、正法一千年が間は、在世のごとく

こそなければ、過去に法華經の種を殖えて法華・涅槃經に

さと

残

もの

げんざいざいせ

たね

お

ひとびと

て覺りのこせる者、現在在世にて種を下ろせる人々もこれ

おお

めつこ

げん

ほけきよう

げどう

ほう

多し。また滅後なれども、現に法華經ましませば、外道の法

しょうじようきよう

移

しょうじようきよう

ごんだいじよう

より小乗經にうつり、小乗經より權大乘にうつり、

ごんだいじよう

ほけきよう

ひとびとかず

りゆうじゆぼさつ

權大乘より法華經にうつる人々数をしらず。竜樹菩薩・

むじやくぼさつ

せしんろんじとう

無著菩薩・世親論師等これなり。

ぞうほういつせんねん

しょうほう

な

像法一千年には、正法のほどこそ無けれども、また

かこ

げんざい

ほけきよう

たね

う

ひとびと

しょうじよう

あ

過去・現在に法華經の種を殖えたる人々も少々これ有り。

ぜんぜん

ぶつぼうぎようはく

しゅうじゅう

へんしゅういし

しかるを、漸々に仏法澆薄になるほどに、宗々も偏執石

固

がまんやま

たか

ぞうほう

すえ

な

のごとくかたく、我慢山のごとく高し。像法の末に成りぬ

ぶつぼう

じょうろんこうじょう

ぶつぼう

かつせん

れば、仏法によつて諍論興盛して、仏法の合戦ひまなし。

せけん

つみ

ぶつぼう

とが

むけんじごく

お

ものかず

世間の罪よりも仏法の失によつて無間地獄に墮つる者数を

しらず。

いま

まっぼう

い

にひやくよさい

かこ

げんざい

ほけきよう

今はまた、末法に入つて二百余歳、過去・現在に法華經の

たね

う

ひとびと

突

果

たね

殖

種を殖えたりし人々もようやくつきはてぬ。また種をうえ

ひとびと

しょうしょう

せけん

だいかくにん

しゅつせ

ほうぼう

たる人々は少々あるらめども、世間の大悪人・出世の謗法

もの

かず

くに

じゅうまん

たと

たいか

なか

しょうすい

の者、数をしらず国に充満せり。譬えば、大火の中の小水、

たいか

なか

しょうか

たいかい

なか

みず

だいち

なか

こがね

大水の中の小火、大海の中の水、大地の中の金なんどのご

あくじう

かこ

ぜんじう

とく、悪業とのみなりぬ。また過去の善業もなきがごとく、

げんざい

ぜんじう

験

みだ

みようじう

ひと

現在の善業もしるしなし。あるいは弥陀の名号をもつて人

くる

ほけきよう

捨

はいじようこうげ

失

を狂わし、法華經をすてしむれば、背上向下のとがあり。

ぜんしゆう

た

きようげ

しyou

ぶつきよう

しん

ほう

あるいは禅宗を立てて教外と称し、仏教をば真の法にあ

べつじよ

ぞうじようまん

お

ほつそう

さんろん

らずと蔑如して増上慢を起こし、あるいは法相・三論・

けごんしゆう

た

ほけきよう

くだ

しんごんしゆう

だいにちしゆう

華嚴宗を立てて法華經を下し、あるいは真言宗・大日宗と

しyou

ほけきよう

しやかによらい

けんきよう

しんごんしゆう

およ

称して、「法華經は釈迦如来の顕教にして真言宗に及ば

とううんぬん

ず」等云々。

じねん

ほうもん

まよ

もの

しし

しかるに、自然に法門に迷う者もあり、あるいは師々に

まよ　もの

がんそ　ろんじ　にんし　めいほう　とし

よつて迷う者もあり、あるいは元祖・論師・人師の迷法を年

ひさ　しんじつ　ほう　つた　きた　もの

あつき　てんま

久しく真実の法ぞと伝え来る者もあり、あるいは悪鬼・天魔

み　い　替

あくほう　ひろ　しょうほう

もの

の身に入りかわりて悪法を弘めて正法とおもう者あり、あ

しょうじょういちず　しょうほう

だいほう　ぎよう

るいはわずかの小乗一途の小法をしりて大法を行ずる

ひと　がまん　わ　しょうほう　ぎよう

人はしからずと我慢して、我が小法を行ぜんがために

だいほう　ひほう　さんじ　もの

じひま

大法・秘法の山寺をおさえとる者もあり、あるいは慈悲魔と

もう　ま　み　い　さんねい　み　たい　しょうじょう　いっぽう

申す魔身に入つて、三衣一鉢を身に帶し、小乗の一法を

ぎよう　輩　しょうほう　たも　こくちゅう　とうりよう

行ずるやから、わずかの小法を持って、国中の棟梁た

ひえいざん　りゆうぞう　ちしや　いちぶん　おし

る比叡山、竜象のごとくなる智者どもを、一分我が教えに

違

み

じゃけん

もの

あくにん

打

おも

たがえるを見て、邪見の者、悪人なんどうち思えり。

あつけん

こくしゅ

誑

おうわく

しょうほう

この悪見をもつて、国主をたばらかし誑惑して、正法の

ごきえ

薄

はこく

はぶつ

いんねん

御帰依をうすうなし、かえつて破国・破仏の因縁となせる

だつき

ほうじ

もう

きさき

こころ

なり。かの姐己・褒姒なんど申せし後は、心もおだやか

見 目 形 ひと

ぐおう

あい

くに

に、みめかたち人にすぐれたりき。愚王、これを愛して国を

えん

とうせい

ぜんじ

りつし

ねんぶつしや

もう

ほろぼす縁となる。当世の禅師・律師・念仏者なんど申す

しょういち

どうりゆう

りようかん

どうあみ

ねんあみ

もう

ほつし

聖一・道隆・良観・道阿弥・然阿弥なんど申す法師ども

きゅうごう

ふん

じき

せいし

ごおう

誑

は、鳩鴿が糞を食するがごとく、西施が呉王をたばらかし

似

わ

しょうじようしゅうふん

ろにゅう

かい

たも

しににたり。あるいは我が小乗臭糞の驢乳の戒を持つて。